

## 当科における入院加療を要した伝染性単核症の検討

荒井 潤<sup>1)</sup> 保富宗城<sup>1)</sup> 上野ゆみ<sup>2)</sup> 酒井章博<sup>2)</sup>  
戸川彰久<sup>1)</sup> 田村真司<sup>1)</sup> 山中 昇<sup>1)</sup>

1) 和歌山県立医科大学耳鼻咽喉科頭頸部外科

2) 公立那賀病院耳鼻咽喉科

口腔咽頭は外界と直接接している部位であるため、外部より侵入した細菌、ウイルス、クラミジア、マイコプラズマなど様々な微生物が定着する。伝染性単核症は、思春期から若年青年層に好発し、大部分が Epstein-Barr ウイルス (EB ウイルス) の初感染によって発症することから、kissing disease とも呼ばれている。伝染性単核症同様の症状は、他のウイルス感染でも起こることがあり、伝染性単核症様症候と呼ばれるが日常臨床で目にする機会は比較的まれである。今回我々は伝染性単核症で入院を要した12症例に関して、前医での治療内容・臨床経過・ウイルス抗体価、それに付随した全身症状に関して検討を加え報告する。内訳はEBウイルスが10例、サイトメガロウイルスが1例、Human immunodeficiency virus (HIV) が1例であった。サイトメガロウイルス、HIVともに診断確定が困難であった。今回入院が必要となったすべての症例では、血清学的診断が有用であったものの、結果が出るまでに数日を要するため初診時での詳細な観察が非常に大切になってくると思われた。また、ペニシリン系抗菌薬の使用で皮疹の増悪が発生することもあり、初回時の治療選択には、これらの疾患に常に注意を払わなければならないと考えられた。